

み　た　ち  
**三太刀遺跡(Ⅱ)**

東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

2004

財団法人 広島県教育事業団

# 三太刀遺跡(Ⅱ)

東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（3）





a 遺跡全景（調査後、南から）



b S B 2 (東から)

## 例　　言

1. 本書は、平成14（2002）年度に実施した東本通土地区画整理事業に係る三太刀遺跡（豊田郡本郷町大字本郷所在）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査及び報告書作成は、本郷町との委託契約により財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。また、その後の業務は、平成15年4月1日に財団法人広島県埋蔵文化財調査センターの業務を引き継いだ財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室が行った。
3. 発掘調査は梅本健治、濱岡才二（現・安芸郡熊野町立熊野東中学校）が担当した。
4. 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は、梅本、濱岡が中心となって行った。
5. 本書は、梅本が執筆・編集した。
6. 本書に使用した遺構の略号は次のとおりである。  
S B；竪穴住居跡、S K；土坑、S D；溝状遺構、S X；性格不明の遺構
7. 土器の断面については、須恵器は黒ヌリ、そのほかは白ヌキである。
8. 図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。
9. 本書に使用した北方位はすべて平面直角座標第III座標系北である。
10. 第1図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000の地形図（三原・垣内・河内・竹原）を使用した。

## 目 次

|                |      |
|----------------|------|
| I はじめに.....    | (1)  |
| II 位置と環境.....  | (2)  |
| III 調査の概要..... | (7)  |
| IV 遺構と遺物.....  | (9)  |
| V まとめ.....     | (26) |

## 巻頭図版目次

a 遺跡全景（調査後、南から）

b S B 2（東から）

## 挿図目次

|  |      |
|--|------|
| 第1図 三大刀遺跡周辺遺跡分布図 (1:25,000) .....      | (3)  |
| 第2図 周辺地形図 (1:2,000) .....              | (8)  |
| 第3図 遺構配置図 (1:200) .....                | (9)  |
| 第4図 S B 1・S B 3 実測図 (1:60) .....       | (10) |
| 第5図 S B 2 実測図 (1:60) .....             | (12) |
| 第6図 S K 1・S K 2 実測図 (1:40) .....       | (13) |
| 第7図 S D 1 実測図 (1:60) .....             | (15) |
| 第8図 S X 1・S X 2 実測図 (1:60) .....       | (15) |
| 第9図 S X 3・S X 4 実測図 (1:40) .....       | (15) |
| 第10図 包含層土層断面実測図 (1:60) .....           | (16) |
| 第11図 出土遺物実測図 (1) (1:3) .....           | (19) |
| 第12図 出土遺物実測図 (2) (1:2, 1:3, 1:4) ..... | (21) |
| 第13図 出土遺物実測図 (3) (1:2, 1:3) .....      | (25) |

## 図版目次

図版1 a 遺跡遠景（東から）

b 遺跡遠景（東から）

c 遺跡近景（北東から）

図版2 a 遺跡全景（調査前、南東から）

b 遺跡全景（調査後、南から）

c 遺跡全景（調査後、北から）

図版3 a SB 1（東から）

b SB 2（東から）

c SB 2（北から）

図版4 a SB 2（東から）

b SB 2（南東から）

c SB 3（東から）

d SK 1（西から）

e SK 2（南から）

f SD 1（東から）

g SB 1 作業風景（東から）

h SD 1 周辺作業風景（西から）

図版5 a SX 3（東から）

b SX 4（西から）

c SX 3 土層（東から）

d SX 4 土層（西から）

e SX 1（東から）

f 包含層土層

（B-B'，北東から）

g 包含層遺物出土状況

（E 1 区，南から）

h 包含層土層

（C-C'，北東から）

図版6 出土遺物

## I はじめに

三太刀遺跡の発掘調査は東本通土地区画整理事業に係るものである。本事業は、広島空港をはじめとする空陸の交通条件に恵まれた本郷町市街に東接する利便性の高い東本通地区において、急速な宅地化に伴って防災面などの様々な問題が想定されるなかで、先行的な都市基盤整備や土地利用の増進を図り、ひいては広島県の空の玄関口に相応しい町づくりを進めようとするものである。

本郷町（都市計画課）は、平成5（1993）年7月、当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて、本郷町教育委員会（以下、「町教委」という。）と協議した。町教委と広島県教育委員会（以下、「県教委」という。）はこれを受けて現地踏査を行い、同年12月町教委から本郷町に、事業地内に試掘調査が必要な箇所が1か所（周知の遺跡である三太刀遺跡・三太刀城跡・みたち古墳群が存在する三太刀山及び周辺全体）存在する旨を回答した。これらのうち、すでに三太刀遺跡（大字本郷3817-1, 3818, 3819, 3820-2, 3824, 3825-2, 3827, 3828, 3830, 3870, 1,865m<sup>2</sup>）を平成12（2000）年度、みたち第2・3号古墳を平成13（2001）年度に財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下、「センター」という。）が本郷町の委託を受けてそれぞれ発掘調査した。その後、県教委は三太刀遺跡の大字本郷3831, 3833, 3834, 3835, 3836-2について試掘調査を実施して遺跡の確認を行なった。これを受け、本郷町は平成14（2002）年3月18日付けてセンターに三太刀遺跡（1,100m<sup>2</sup>）の調査依頼を行なった。しかし、センターは調査工程上、大字3831を除く812m<sup>2</sup>の発掘調査を実施することとし、本郷町と平成14（2002）年5月1日付けて委託契約を結び、同年9月9日から11月15日までの約2か月間発掘調査を行った。

本報告書は、以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財の資料として、またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては、本郷町都市計画課、本郷町教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

## II 位置と環境

三太刀遺跡が所在する豊田郡本郷町は、広島県中央部の瀬戸内海に注ぐ沼田川河口に開けた町である。町城の大半を標高100~400m台の低丘陵が占めており、平地は町域北半を北西から南東方向に流れる沼田川とこれに南から流入する尾原川沿いに狭小な谷底平野がみられるに過ぎない。三太刀遺跡はこの本郷町東端の三原市との境付近に位置し、本郷町市街の東方に広がる町内で最も広い沼田川北岸の氾濫原に起因する平野の一角に存在する。

安芸国と備後国の国境の町である本郷町は町内を旧山陽道が通り、瀬戸内海まで10kmと至近距離にある。これらのことから、古来政治的、社会的に要衝の地として栄え、尾原川沿いの巨石墳や中世小早川氏の史跡高山城跡に代表される多くの文化財を残している。ここでは、調査された遺跡を中心に本郷町及び三原市西部の歴史的環境について触ることにする。

**旧石器時代** 沼田川河口から3kmほどの瀬戸内海に浮かぶ小島宿<sup>すくね</sup>島で採集された貝岩製の搔器などがある。

**縄文時代** この時代の遺跡の調査例は少なく、土器・石器などの採集例が大半を占める。早期の遺跡は海浜に面した標高10~20mの丘陵上に立地しており、三原市時貞遺跡、同天神山遺跡、同古城遺跡がある。これらの遺跡では縄文土器（押型文・無文・条痕文）や安山岩製の石器（スクレイバー・石鎌・石錐）がみつかっている。前・中期については様子がよく分からぬが、後・晩期になると低地への定着化が進み、沼田川下流域や三原湾岸の低地を望む丘陵の裾部に遺跡が立地するようになる。後期の遺跡としては、三原市大串遺跡、同福田谷貝塚、本郷町宮地川遺跡がある。磨消縄文、沈線文や無文の土器や安山岩製の石鎌・不定形刃器が出土している。三原市貝持貝塚は昭和37（1962）年に発掘調査が実施された後・晩期のハマグリを主とする貝塚で、精製土器（浅鉢形・鉢形）と粗製土器（深鉢形）のほかに、安山岩製の石鎌や貝輪が出土した。

**弥生時代** 前・中期の様子はよく分からぬが、後期の遺跡では本郷町陣べら遺跡群<sup>(1)</sup>や同舟木遺跡<sup>(2)</sup>がある。

陣べら遺跡群は沼田川西岸の丘陵端部の尾根上に立地する集落跡・墳墓群で、堅穴住居跡2軒、土坑墓・木棺墓11基、壺棺墓2基などから成る。堅穴住居跡は平面形隅丸方形・方形、4~8本柱の弥生時代後期後半~末のものである。墓坑群は8m×10mの範囲に密集して営まれており、共同墓地の様相を呈している。そのなかで、第9号墓（木棺墓）は朱の副葬が見られ、指導者の人物の墓ではないかと考えられている。舟木遺跡は径約3mの円墳状の積石を伴う、弥生時代後期の壺棺墓である。

このほか遺構は明確ではないが、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての当地域における土器の変遷を探る上で貴重な土器群が2か所で出土している（横見堺寺跡下層出土土器群・陣門第



- 1 三太刀遺跡
- 2 みたち古墳群
- 3 県史跡兜山古墳
- 4 塙岡第1号古墳
- 5 宮ノ谷第8号古墳
- 6 銀神古墳群
- 7 潟箭古墳
- 8 福札古墳
- 9 高木山城跡
- 10 史跡横見庵寺跡
- 11 宮地川遺跡
- 12 県史跡梅木平古墳
- 12 鎌治墨追第4号古墳・宮仕川経塚
- 13 陣べら造跡群
- 14 西野田経塚
- 15 史跡新高山城跡
- 16 史跡高山城跡
- 17 昆沙門山下遺跡

第1図 三太刀遺跡周辺遺跡分布図 (1:25,000)

3号古墳前面包含層出土土器群<sup>(4)</sup>)。これらは壺・甕・鉢・高杯などの器種から成るが、壺などの在地的様相を示す土器群のほかに、タタキをもつ畿内第V様式の甕の一群を含み、当地域と畿内地域との密接な交流を示すものとみられている。

古墳時代 この時代の遺跡としては多くの古墳があるが、集落跡・生産遺跡など古墳以外の様相は明らかでない。古墳は尾原川両岸（本郷町下北方・南方）、沼田川南岸（三原市沼田西町・沼田東町）の丘陵上や山麓を中心に濃密に分布する。概して、丘陵上には箱式石棺・木棺直葬・粘土櫛など堅穴系の埋葬施設をもつ古墳が立地し、丘陵裾には横穴式石室をもつ古墳がみられる。前者は数基から10基程度、後者は2、3基から数基程度が群集する例が多い。

前期の古墳としては、本郷町鎌治屋迫第4号古墳・三原市宮ノ谷第8号古墳がある。鎌治屋迫第4号古墳は全長21mの小型の前方後円墳で、後円部頂上の箱式石棺から中国・三国時代の画文帯神獣鏡や勾玉が出土しており、4世紀末～5世紀初頭に築造されたと考えられている。4世紀後半に築造された宮ノ谷第8号古墳は径10mの小型の円墳で、埋葬施設の木棺から内行花文鏡・鉄矛・刀子・碧玉製管玉が、棺外から鉄刀・鉄斧・土師器などが出土している。

中期の古墳には三原市岡第1号古墳、同県史跡兜山古墳などがある。鳩岡第1号古墳は径36.5mの大型の円墳で、粘土櫛を埋葬施設とする。墳丘には形象埴輪・円筒埴輪が廻り、5世紀代に築造時期が求められている。兜山古墳は径45mの県内最大級の円墳で、北側に方形の造り出しがある。埋葬施設は不明である。墳頂部と墳裾部に二重に円筒埴輪列が廻らされ、形象埴輪片も採集されている。築造時期は5世紀後半に求められている。沼田川南岸の本郷町と三原市の境に築かれた福礼古墳<sup>(5)</sup>は粘土櫛を埋葬施設とする径16～18mの円墳で、櫛内から鉄刀・刀子が、墳丘からは円筒埴輪が出土した。築造時期は5世紀中頃に求められている。本郷町陣開遺跡では5世紀代の箱式石棺2基を検出し、第1号箱式石棺から人骨とともに鉄鎌4・鉈3がみつかっている。

後期の古墳としては、径8mの円墳で木棺を埋葬施設とする陣べら第1号古墳がある。木棺内から鉄刀が、周辺からは須恵器（蓋杯・壺）、土師器（壺）が出土しており、築造年代は6世紀前半と考えられている。

6世紀後半以降多くみられるようになる横穴式石室をもつ古墳としては、本郷町天高第1号古墳<sup>(6)</sup>、同陣開古墳群<sup>(7)</sup>（4基）、同金壳古墳群<sup>(8)</sup>（2基）、三原市鎌神古墳群<sup>(9)</sup>（5基）などがある。天高第1号古墳は比高15mほどの丘陵端部に7世紀代に築かれた古墳で、石室は南方向に開口する。石室背後の小規模な周溝の外で6世紀初頭頃の須恵器4点（杯身1・高杯3）と刀子1点がまとまって見つかっており、何らかの祭祀的意味合いが窺われる。沼田川西岸の陣開古墳群は、尾根線上に立地する第1・2・4号古墳と尾根の第3号古墳に分けられる。第1・2号古墳は小型の、第3・4号古墳はやや大型の横穴式石室を埋葬施設としている。第3号古墳の石室からは鉄刀・鎌・刀子・鉄釘が、第4号古墳の石室からは須恵器（杯蓋・杯身・壠・提瓶）、刀子、石製紡錘車が出土した。陣開古墳群の築造時期は、第3・4号古墳が6世紀後半、第1・2号古墳が7世紀代と考えられる。金壳第1・2号古墳は尾根の急峻な斜面に築かれた小型の横穴式石

室を埋葬施設とする古墳で、築造は7世紀代に求められている。錢神古墳群は沼田川南岸の低丘陵の尾根線上や南斜面に6世紀後半～7世紀代に築かれた古墳群で、土師器・須恵器や鉄刀・刀子・耳環のほかに馬具が出土している。また、第2号古墳からは暗文の入った畿内系の土師器・杯が出土している。

このように6世紀後半～7世紀代にかけて小・中規模の横穴式石室を埋葬施設とする径10m程度の古墳が盛んに営まれる一方で、尾原川左岸の丘陵裾を中心とする限られた地域では、6世紀末～7世紀に県史跡梅木平古墳、史跡御年代古墳、県史跡貞丸第1・2号古墳、三原市溜箭古墳など巨石を用いた長大な横穴式石室をもつ古墳や石室内部に家形石棺を納めた古墳など県内でも有数の規模・内容の古墳が築造されている。その背後には畿内政権と深く関わりをもつ官人的性格の強い豪族層がいるものと考えられる。

古代 倭名類聚抄によれば、律令制下当地域はほぼ沼田郡に該当し、のち北側の豊田郡に包括される。北東から南西方向に通る古代山陽道の梨葉駅が現・本郷町下北方の茅ノ市に比定されている。古代の遺跡としては、本郷町の毘沙門山下遺跡、史跡横見廃寺跡<sup>(1)</sup>、西野田経塚などがある。毘沙門山下遺跡は沼田川北岸の毘沙門山南麓から県内最古とみられる素弁蓮華文の軒丸瓦片が見つかったもので、飛鳥時代の寺院跡が存在する可能性が指摘されている。横見廃寺跡は尾原川北岸の茅ノ市近くの丘陵南麓に築かれた白鳳期の寺院跡で、7間×4間の講堂に比定される建物基壇と塔跡かとされる建物基壇が東西に並ぶ西向きの四天王寺式伽藍配置とされている。出土瓦に奈良県の山田寺跡や法隆寺若草伽藍跡の瓦に類似したものがみられる一方、三次市寺町廃寺跡の水切りをもつ複弁蓮華文軒丸瓦が出土していることから、中央の有力寺院や豪族と密接な関係をもつ地域の有力豪族の系譜を引く郡司層が本寺院の建立に深く関わっているとみられている。この横見廃寺跡周辺には西野田経塚や宮仕川経塚・法花行經塚などが存在する。

なお、陣開第3号古墳の石室内から7世紀末～8世紀代の土師器（杯・皿）、須恵器（杯蓋・高台付杯・台付長頸壺・台付短頸壺）が出土しており、石室の再利用に伴うものと考えられる。

中世 中世の当地域は、平安時代末期に成立する寄進地系荘園の京都蓮華王院領沼田荘を舞台に展開する。沼田荘の地頭には鎌倉御家人小早川氏が補任されるが、鎌倉中期の小早川茂平は在京奉公人として京に常駐し、荘園領主西園寺氏と結びつきを深めて在地支配力を強化した。嘉禎元（1235）年には三太刀遺跡の南方に不断念仏堂を建立し、その仏餉灯油料田・修理田を得るために沼田川沿いの氾濫原（塩入荒野）の開発に着手した。この干拓は室町時代にかけて進められ、「沼田千町田」ともいわれる広大な新田が完成した。その後小早川氏は、室町將軍の奉公衆として將軍や幕府の權威などを背景に大名領國化を進めたが、室町幕府の衰微とともにその勢力は弱体化し、最終的には中国一円領主である毛利氏に吸収される。

中世の遺跡としては、山城跡がある。調査された本郷町の金壳城跡、正広城跡や小早川氏の本拠である史跡高山城跡・同新高山城跡をはじめ、沼田荘の開発領主である沼田氏の居城と伝えられる高木山城跡などがある。山城跡以外では、福礼古墳の墳丘の北裾で検出した戦国期を中心とした時期の中世墳墓5基（火葬1・土葬4）がある。

**註**

- (1) 陣べら遺跡群発掘調査団「陣べら遺跡群発掘調査概報」 1971年
- (2) 潮見浩「広島県豊田郡舟木遺跡」日本考古学協会編「日本考古学年報」9 1961年
- (3) 広島県教育委員会「安芸横見廐寺の調査」Ⅱ 1973年
- (4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「陣開第3号古墳」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(X) 1994年
- (5) 広島県教育委員会「福礼古墳発掘調査報告」 1973年
- (6) 豊田郡本郷町教育委員会「陣開追跡」 1993年
- (7) 註(1)と同じ。
- (8) (財)広島県埋蔵文化財調査センター「天高第1号古墳」 1983年
- (9) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「陣開第2号古墳」「金亮・陣開」 1994年  
註(4)と同じ。
- 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「陣開第4号古墳」「金亮・陣開」 1994年
- (10) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金亮古墳群」「金亮・陣開」 1994年
- (11) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「鉢神第1・3号古墳発掘調査報告書」 1986年  
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「鉢神第2・4・5号古墳発掘調査報告書」 1987年
- (12) 広島県教育委員会「安芸横見廐寺の調査」Ⅰ～Ⅲ 1972～1974年
- (13) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金亮城跡」「金亮・陣開」 1994年
- (14) 本郷町教育委員会「正広城跡」 1992年
- (15) 註(5)と同じ。

**参考文献**

- ・本郷町史編纂委員会編「本郷町史」通史編 1996年
- ・三原市役所編「三原市史」第一巻通史編一 1977年

### III 調査の概要

三太刀遺跡は豊田郡本郷町東端の三原市との境付近に位置する。本郷町市街の東側に広がる東西2.5km、南北1.3kmの沖積平野の中央部南端に独立丘陵（三太刀山）があり、その一角に本遺跡は存在する。南100mの至近距離を沼田川が東流し、やがて瀬戸内海に注ぐ。

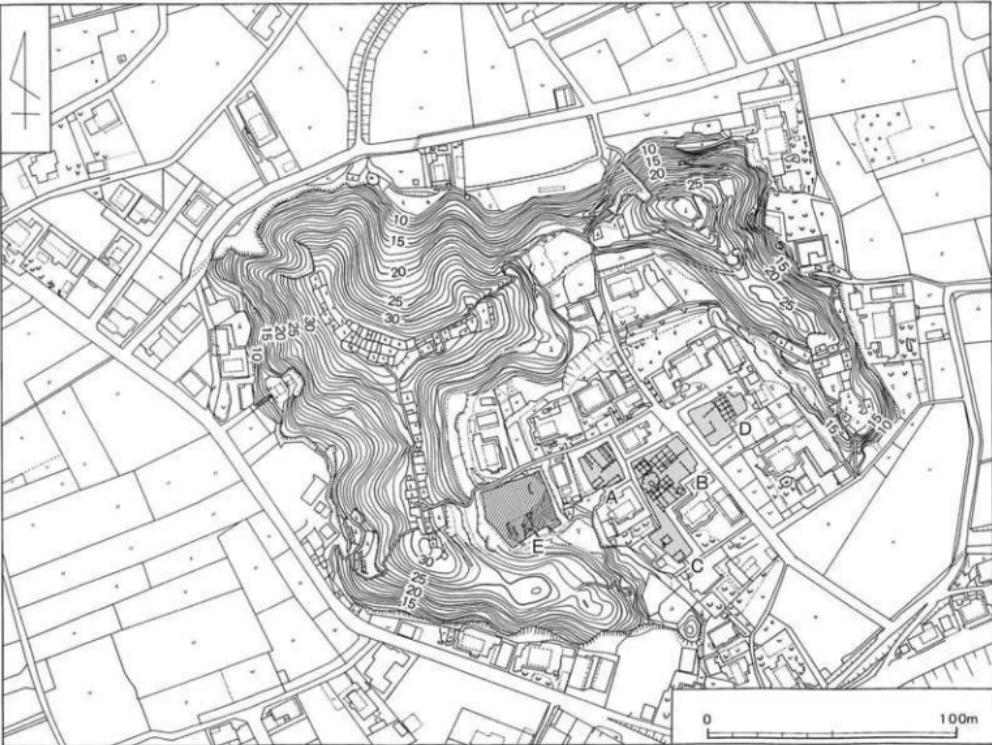
三太刀山（標高35.4m）は東西280m、南北200m、周囲の水田面からの比高20~30mの小丘陵である。丘陵の南東側が幅10mほど途切れたコ字形の平面形をなし、その内側に東西160m、南北120mの平坦地（標高数～10m）が存在する。三太刀遺跡はこの三太刀山内部の平坦地を中心に存在する。平成12年度にその一部（A～D区、1,865m<sup>2</sup>）の調査を行い、14世紀を中心とした時期の集落跡を検出した。今回の調査区（E区、812m<sup>2</sup>）は平坦地の西側中央の丘陵裾の西から東に下る緩斜面に立地する（標高13～19m）。現況は竹林で、南北に長い平坦面4段から成る。便宜的に西から東に各平坦面をE 1～E 4区と呼称した。造構面までは30～70cmの深さで概して北側は浅く、南側はやや深い。造構面は北半が花崗岩バイラン土の砂地で、南半はやや締まった橙褐色砂質土である。調査の手順としては、各平坦面に1～2本のサブトレーンチを入れて土層の堆積状況を確認したあと、重機（ミニバックホー）により表土の除去を行い、その後造構の精査と掘り下げを行なった。なお、主に安全面から、調査区際から幅1～2m程度安全帯として掘り残して調査を行った。

調査成果から判断すると、もとは調査区の北側に小さな尾根状の高まり、南側には小さな谷状の落ち込みが存在したが、恐らく近世末～近代に宅地や畠地の造成を目的にして現状のように削平されたと考えられる。よって、調査区北半の中世以前の造構は破壊され、南半にのみ中世以前の造構面が残存したとみられる。この調査区南半の谷状落ち込みには古墳時代～古代の土器包含層が堆積し、その包含層下には竪穴住居跡2軒が存在した。

検出した造構の内訳は、竪穴住居跡3軒（SB 1～SB 3）、土坑2基（SK 1・SK 2）、溝状造構1条（SD 1）、性格不明の造構4基（SX 1～SX 4）である。出土遺物の総量は中型コンテナ箱に3箱だが、完形品は皆無でいずれも破片である。本報告書では計72点を実測・掲載する。その内訳は、土師器37点（壺・甕・高杯・瓶ほか）、須恵器18点（杯蓋・杯身・杯・壇・甕・高杯ほか）、手づくね土器2点、土師質土器4点（小皿・皿）、瓦器1点（碗？）、繩文土器3点、土製品1点（棒状土錐）、瓦4点（丸瓦・平瓦）、石製品2点（砥石）である。

註

（1）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「三太刀遺跡」（1） 2003年



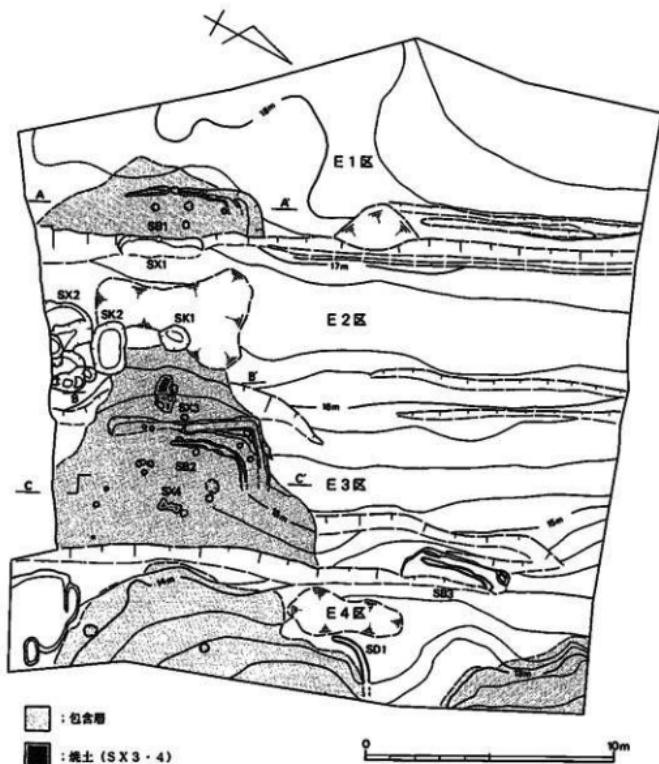
第2図 周辺地形図 (1:2,000) (斜線部分は平成14年度調査区、アミ目は平成12年度調査区を示す。)

## IV 遺構と遺物

遺構としては堅穴住居跡・土坑・溝状遺構・性格不明の遺構が、遺物としては土師器・須恵器・手づくね土器・瓦器・土師質土器・縄文土器などのほかに、瓦・棒状土錐・砥石がある。

### (1) 堅穴住居跡

計3軒で、SB1・SB2は調査区南半の包含層下で、SB3は調査区北半のE3区東縁でそれぞれ検出した。いずれも高所側の住居西半のみが残存し、ほかは削平・流出している。住居西

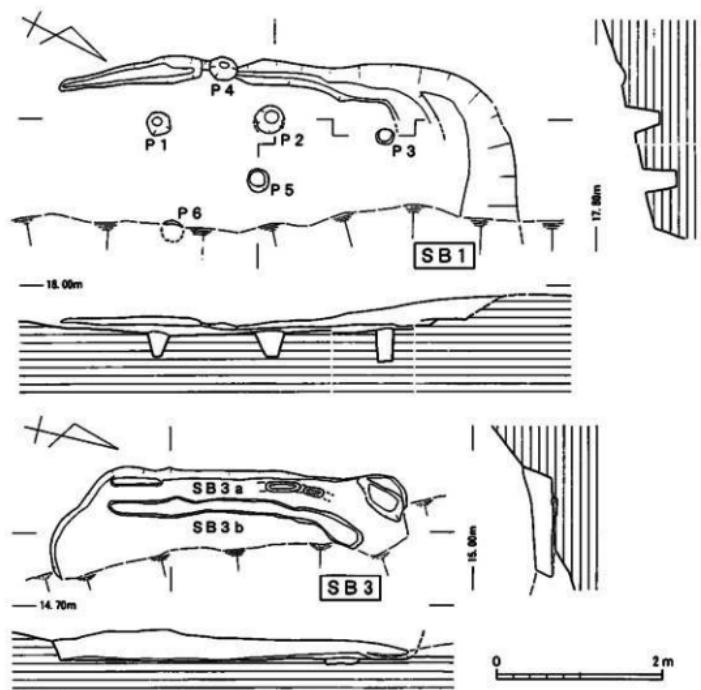


第3図 遺構配置図 (1:200)

辺を中心とした壁溝とピット群から成り、壁溝の残存部分の形状からいずれも平面方形あるいは隅丸方形の住居と考えられる。SB 2・SB 3では壁溝を2条ずつ検出していることから、住居の建替えが考えられる。ただ、いずれも床面が大きく削平され、柱穴も並びが明確なものは殆どない。

#### ① SB 1 (第4図、図版3 a)

最高所の平坦面E 1区の南半に位置する。住居跡の西半が残り、東側は削平されて失っている。西辺壁溝及び北辺西端の住居壁と壁溝を残し、南辺は住居壁・壁溝ともに流出している。残存部分から推定される住居の平面形は隅丸方形である。現存規模は、西辺の長さ5.16m、北辺の長さ1.73m、壁高(北壁)30cmである。壁溝は幅14~46cm、深さ3cmである。床面は東縁中央が最も低く、北西隅及び南北隅が最も高く(高低差40cm程度)、東縁中央に向かって擂鉢状に削平されている。西辺壁溝から東20~30cmの床面上に壁溝に沿って柱穴とみられる3基のピットが比較的整



第4図 SB 1・SB 3実測図 (1:60)

然と並ぶ（P 1-P 2-P 3）。柱間距離はP 1-P 2間・P 2-P 3間とも1.4mである。柱穴規模は、P 1が径28cm、深さ40cm、P 2が径36cm、深さ41cm、P 3が長径22cm、短径18cm、深さ41cmとほぼ同じ大きさである。このほかにピット3基（径28~34cm、深さ11~41cm）が存在する（P 4～P 6）。出土遺物はない。

### ② S B 2（第5図、図版3 b・3 c・4 a・4 b）

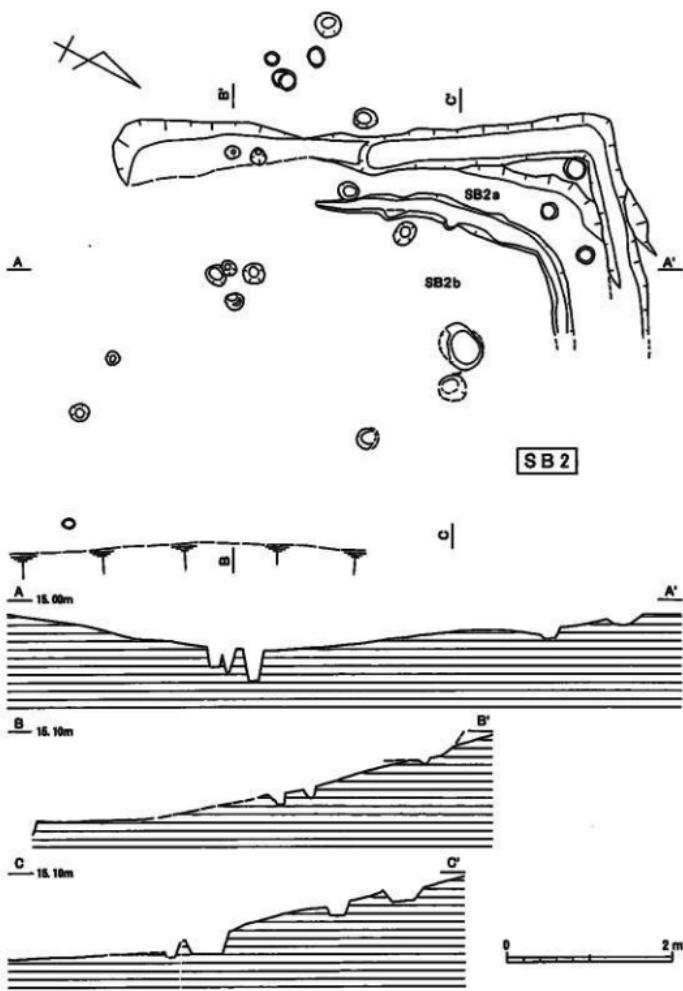
2段目の平坦面であるE 2区の東端から3段目のE 3区にかけて存在する住居跡である。住居の西辺壁溝と北辺西半の住居壁・壁溝を中心に残存し、壁溝2条と22基のピットを検出した。住居2軒が重複すると考えられ、北西側に平面方形のS B 2 a、南東側に丸みの強い隅丸方形のS B 2 bが存在する。その新旧関係は不明である。住居の規模は、S B 2 aが西辺6m、北辺（現存規模）2.62mで、壁高は最も残りの良い住居北西隅で29cmである。壁溝は西辺北半から北辺西半にかけて残存し、幅38~47cm、深さ5~14cmである。S B 2 bは住居壁は残らず、壁溝のみが残存する。その規模は南北3m、東西1.2mほどで、幅6~32cm、深さ5~16cmである。床面はS B 1同様鉢鉢状に大きく削平されており（高低差約80cm）、東半中央付近が最も低く、西端壁溝際が最も高い。22基のピットのうち、S B 2 aの壁溝の西側に存在する5基（径17~31cm、深さ8~20cm）と南東側の3基（径16~23cm、深さ10~22cm）については、その位置から考えて、S B 2に伴う可能性は低い。S B 2に伴う可能性があるのはその他の14基のピットだが、いずれも並びは整然とはしていない。ピットの規模は径18~58cm、深さ7~47cmである。なお、住居北西隅の壁溝間の床面で最大11cmの段差が見られるが、その性格等については不明である。S B 2に伴う遺物としては、一部のピットで土器片が出土しているが、いずれも細片で時期等については明らかにできない。

### ③ S B 3（第4図、図版4 c）

E 3区北半の東縁に位置する竪穴住居跡で、平面不整方形である。住居西辺を中心に残存し、壁際に断続的な壁溝1条（S B 3 a）、その20cmほど東側にもう1条の壁溝（S B 3 b）が存在する。壁高は最も残りの良い西壁南半で35cmである。壁溝の規模は、S B 3 aは南端・中央の壁溝は幅10cm、深さ1~3cm程度だが、北西隅の壁溝は幅32cm、深さ（最大）11cmと大きい。S B 3 bの壁溝の現存規模は長さ3.1m、幅13~29cm、深さ3~7cmである。床面は比較的平坦だが、柱穴・ピットは全くみられない。S B 3に明確に伴う遺物はないが、周辺から土師器3点（小型丸底壺56、高杯58・59）が出土している。

## （2）土坑

E 2区南半中央で計2基の土坑を検出した（SK 1・SK 2）。いずれも古墳時代～古代の包含層を横して掘り込まれており、西側は近現代の搅乱を受けている。SK 2からは土師質土器・皿が出土していることから、中近世頃の造構と考えられる。



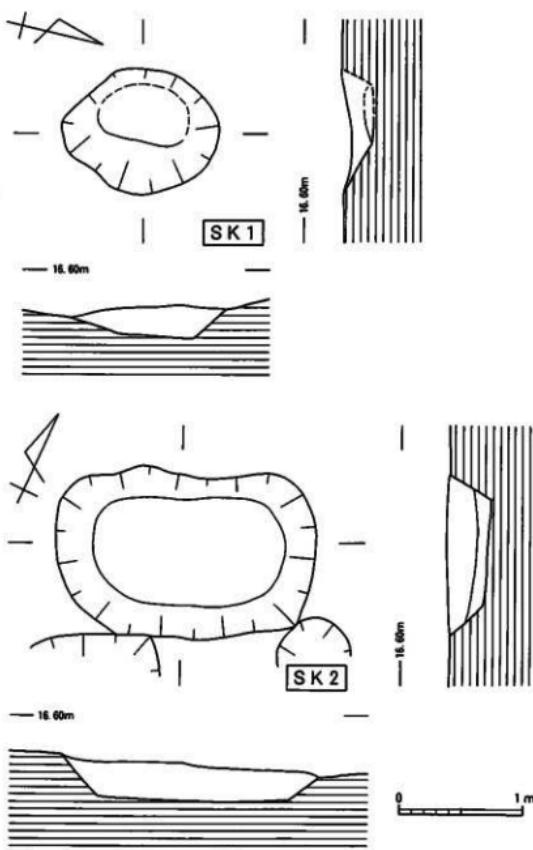
第5図 SB 2実測図 (1:60)

① SK 1 (第6図、図版4 d)

SK 2の北側にある平面不整椭円形の土坑で、長径127cm、短径50cm、深さ27cmである。長軸はやや西に偏しているもののほぼ南北方向を指している。出土遺物はない。

② SK 2 (第6図、図版4 e)

SK 1の南1.3mに位置する平面不整開丸長方形の土坑で、長さ207cm、幅131cm、深さ39cmである。長軸はほぼ東西方向を指す。覆土から土師質土器・皿1点(46)が出土している。



第6図 SK 1・SK 2実測図 (1:40)

**出土遺物（第12図46）** 土師質土器・皿の底部片で、復元底径8.3cmである。やや突出気味の平底から低平な体部が延びる。外面には緩やかな稜とその上に沈線状の凹みがみられる。調整は、体部内外面回転ナデで、内底面は凹凸が著しい。底部切り離し法は不明確であるが、回転糸切りの可能性がある。色調淡黄褐色で、比較的精良な胎土である。

### （3）溝状遺構

#### S D 1 (第7図、図版4 f)

E 4区北半で検出した溝状遺構で、包含層の北縁に沿うように走る。平面形は円形気味で、現存規模は長さ2.3m、幅18~29cm、深さ3~8cmである。遺物は出土していない。

### （4）性格不明の遺構

計4基あるが、いずれもE 1~E 3区南半に位置する。段状のS X 1、大型土坑状のS X 2と焼土層2基（S X 3・S X 4）である。焼土層はいずれも包含層中に存在するが、伴う溝や柱穴などの掘り込みは見られず、単独の遺構である。

#### ① S X 1 (第8図、図版5 e)

E 1区とE 2区の間の崖面で検出した段状の遺構で、底面はE 2区の遺構面に近い。現存規模は、長さ3.4m、幅0.84m、高さ（南西隅）49cmで、平面形は不整隅丸長方形である。長軸はやや西に触れるがほぼ南北方向を指す。出土遺物はない。

#### ② S X 2 (第8図)

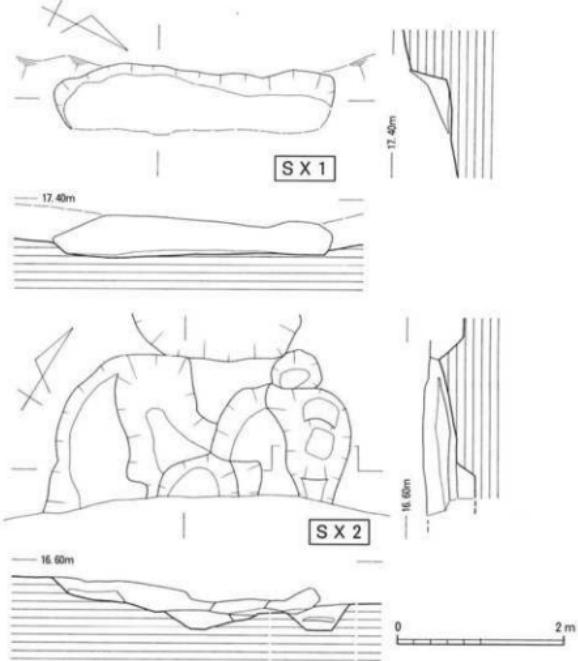
E 2区南端にあり、調査区外に延びている。調査区内の平面形は丸みの強い不整形で、北側はS K 2と接している。内部は凹凸が顕著で、現存規模は東西3.47m、南北1.76m、深さ（最大）0.72mである。出土遺物はない。

#### ③ S X 3 (第9図、図版5 a・5 c)

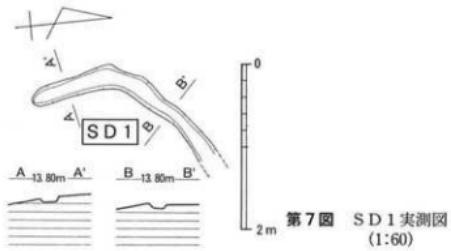
S X 4とともに、包含層中で検出した焼土層である。E 2区南半東縁に位置し、包含層②（灰黄褐色砂質土）直下に存在する（第4図B-B'）。平面形はほぼ東西方向に長い不整隅丸長方形で、東西150cm、南北80cm、厚さ約10cmである。炭層（6層）を焼土（5層）と淡黄褐色砂質土層（焼土を含む、10層）が挟む。直下には厚さ5~6cmの淡褐色粘質土層を介してS B 2西側のピット群が存在するが、関連性は不明である。出土遺物はない。

#### ④ S X 4 (第9図、図版5 b・5 d)

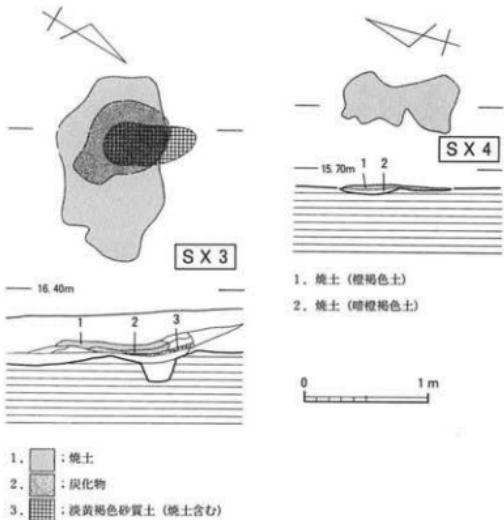
E 3区南半の包含層中に存在する焼土層で、包含層②-1（暗褐色粘質土層）と包含層②-2（褐色砂質土層）の間層である（第4図C-C'）。平面形は南北に長い不整形で、南北92cm、東



第8図 SX1・SX2実測図 (1:60)



第7図 SD1実測図  
(1:60)

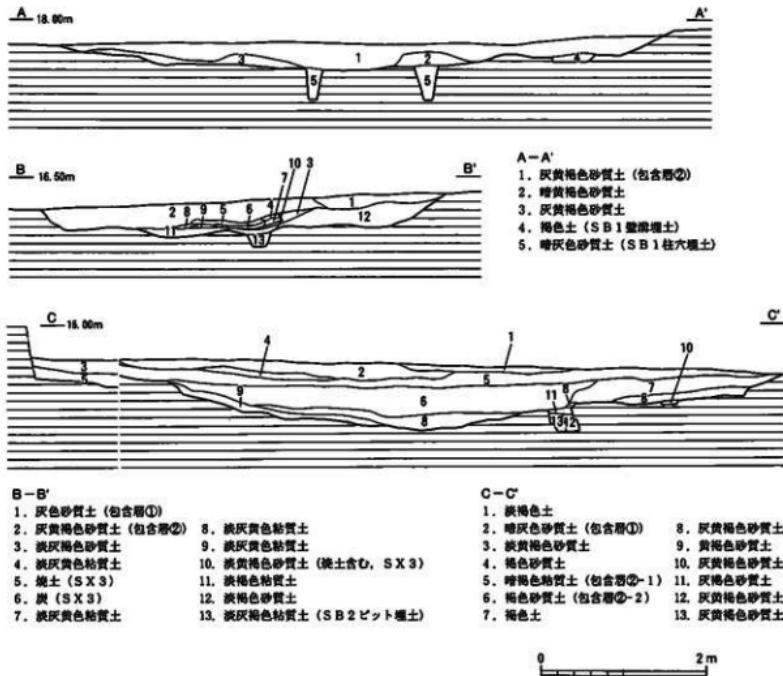


第9図 SX3・SX4実測図 (1:40)

西47cm、厚さ(最大)7cmである。炭の広がりは見られず、上下2枚の焼土層から成る。B-B'の包含層②(2層)とC-C'の包含層②-1(5層)、B-B'の淡褐色粘質土層(11層)とC-C'の包含層②-2(6層)はそれぞれほぼ同一と考えられるので、SX3とSX4は同一の面に存在していることになる。すなわち、SX3・SX4は同一の成因に基づいて形成されたと考えられるが、その具体的な内容については不明である。出土遺物はない。

#### (5) 包含層(第10図、図版5f~5h)

調査区南半は全域(E1~E4区)に谷状に堆積する古墳時代~古代の土師器・須恵器を主体とする遺物包含層である。大きく上下2層に分かれ、須恵器主体の包含層①と土師器主体で須恵器を殆ど含まない包含層②となる。後者はE3区のC-C'では更に②-1と②-2に分かれる。②-2の遺物の包含量は②-1に較べて少ない。これら2枚の遺物包含層が堆積する調査区南半の谷状部分は西から東に末広がりに広がる。現状は後世の大きな削平を受けており、その規模は長



第10図 包含層土層断面実測図(1:60)

さ20m、幅（最大）12.5m、深さ30~80cm程度である。なお、E4区北東隅にも部分的な包含層がある。

#### 出土遺物（第11・12図1~45・47~52、図版6）

報告遺物は計51点で、43・44の2点はE4区北東隅の包含層からの出土である。遺物の内訳は、土師器32点（壺・甕・高杯・椀・低脚杯？）、須恵器8点（杯蓋・杯身・杯・埴・甕）、瓦器1点、土師質土器3点（小皿・皿）、手づくね土器1点、瓦4点（丸瓦・平瓦）、土製品1点（棒状土錐）、石製品1点（砥石）である。

① 土師器（1~32） 壺2点（1・2）、甕10点（3~12）、高杯18点（13~30）、椀1点（31）、低脚杯？1点（32）で、高杯と甕が多い。

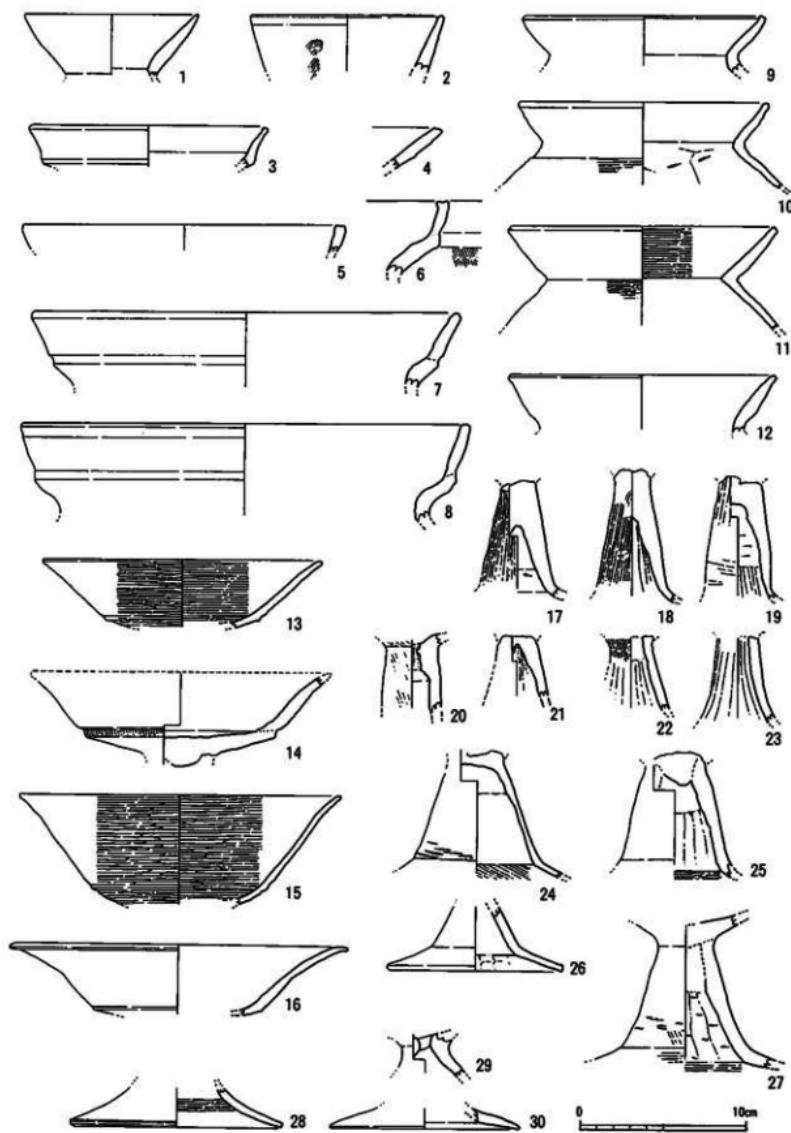
1・2は壺の口縁部である。いずれも斜め上方に直線的に延びるもので、長頸壺あるいは直口壺の口縁部とみられる。1はかなり窄まった頸部から延びる先細りの口縁部で、口縁端部を尖り気味に納める。調整は外側横ナデで、内面は調整不明である。復元口径10.4cmである。2はやや開き気味に立ち上がる口縁部の端部を丸く納めている。調整は、内面から外側口縁部にかけてやや粗い横ナデ、外側は斜め方向のヘラミガキを施している。復元口径14.4cmである。

3~12は甕の口縁部を中心とした破片である。くの字に強く湾曲する擬口縁の端部に開き気味の直線的な口縁を付した二重口縁のもの（3・5~8）と、頸部でくの字に強く屈曲して外上方に直線的あるいはやや内湾気味に延びる口縁部のもの（9~12）がある。前者は復元口径14.0~26.8cmと大型で、後者は復元口径14.0~15.8cmとやや小型である。3は復元口径14.0cmで、外湾して外上方に延びる先細りの口縁部の端部を幾分肥厚させて丸く納める。調整は、内外側横ナデである。5・6は口縁部端面中央と口縁部内面の端部付近が少し凹む。7・8は器形が酷似する復元口径25.4~26.8cmの大型品である。調整は基本的に内外面ともに横ナデで、6の擬口縁外面には斜位気味の縦位ハケ目を施している。なお、6~8の擬口縁と口縁の接合個所の外面は少し凹む。9~12は復元口径14.0cmとやや小型の9と復元口径15.6~15.8cmとやや大型の10~12に分けることができる。9は若干内湾気味の口縁で、端部近くの内面が少し凹み、端面は平坦に納めている。調整は、頸部内面が横方向のナデつけ、その他は横ナデである。10は口縁部内外側横ナデで、外側頸部直下には少し段差が見られる。外側肩部横位ハケ目、体部内面横位ヘラケズリである。11は口縁部内面横位板ナデ、口縁部外側横ナデ、外側頸部は指頭による押さえのためか少し凹む。頸部直下には横位ハケ目がみられる。体部内面は不明確だが丁寧なナデを施している。12は先細りのやや分厚い口縁部で、内面は少し粗い横ナデ、外側は横ナデである。外側の口縁端部直下は少し凹む。

13~30は高杯で、13~16は杯部、17~30は脚部片である。杯部は外湾気味に聞く形態のもので、復元口径10.6~19.6cm、高さ4~7cm程度である。器壁が8mmと分厚いもの（14）から3mmと薄いもの（15）まである。口縁部と体部の境は突堤状をなし、明瞭な稜を形成するもの（13・15・16）が主体で、14は段を形成しその部分に縦位の細かいハケ目を加えている。13・15は橙褐色の

酷似する胎土だが、口径・杯部の高さなど形態的に異なる。調整は、内外面ともに横方向の細かいヘラミガキを施す。14は体部がほぼ水平で円板充填法によって脚部を接合している。調整は、口縁部内外面が横ナデ、体部内面は丁寧なナデつけ、体部外面はヘラケズリあるいはヘラナデと考えられる。16は口縁部中央で強く外反する低平な器形で、やや先細り気味の口縁端部が僅かに外反する。内外面横ナデを施す。なお、16と24はE 1 区の同一地点で出土し、胎土・色調が酷似することから、同一個体である可能性が高い。

脚部片の多くは脚柱部のみで、脚裾部の状況が分かるものは少ない(26・28・30)。若干の脚裾部を残す24・27を含めても、半数に満たない。脚柱部の形態は、脚基部径が2.1~3.1cm、脚柱部下端の径が4.1~4.5cmと細長い筒状のもの(脚柱A、17~23)と、脚基部径が3.3~3.7cm、脚柱部下端の径が5.2~7.8cmと裾が広がる円錐状のもの(脚柱B、24~28)に分けられる。29・30は同一個体と考えられるもので、短い脚柱部に水平気味に聞く脚裾部が付き、復元脚端部径11cmである。脚柱Aは中実のもの(17・18)と中空のもの(19~23)があり、前者はいずれも杯部との接合が挿入付加法により、中空のものの内、20・22・24は接合法によると考えられる。脚柱Aの調整は、17・18は外面が縦方向の細かいハケ目、内面が横方向のヘラケズリ、19は外面の上半が縦方向のヘラミガキあるいは板ナデ、下半が横方向の板ナデで、内面の上半が横方向のヘラケズリ、下半が縦方向のヘラナデである。20は外面が斜め方向の幅広のハケ目のちナデつけ、内面の下半が横方向のヘラケズリ、21は外面が調整不明で、内面はシボリである。22は外面の上半が縦方向の細かいハケ目、下半が縦方向のヘラナデ、23は外面が縦方向のヘラミガキ、内面がシボリである。脚柱Bは24が接合法、25が円板充填法、27は円板充填法あるいは接合法により体部と接合するものと考えられる。脚柱Bの調整は、24は外面が横方向のヘラミガキ、内面が脚柱部は横方向のナデ、脚裾部は横位あるいは斜め方向のハケ目である。25は外面の上半は横方向の丁寧なナデ、下半は縦方向のヘラミガキ、内面の上半は未調整、下半は縦方向のナデ、脚裾部には横方向のハケ目を施す。26は外面が横ナデ、内面は脚柱部が縦方向のナデ、脚裾部が指頭押圧である。27は僅かに残存する体部外面が横ナデ、脚柱部外面が縦方向の板ナデ、脚裾部内外面が横方向のハケ目、内面脚柱部下半は横方向のヘラケズリである。27は淡黄褐色の比較的精良な胎土を用いている。26の脚端部径は10.4cmである。25は不明確だが、24・27は僅かに脚裾部が残っており、いずれも脚柱部から明瞭に屈曲して大きく聞く直線的な脚裾が付く。28は脚裾部片で、脚端部径12.6cmである。やや外反気味に立ち上がっており、脚柱Bに付くような直線的な脚裾と異なり、恐らく脚柱Aに付くスムースに広がる円錐状の脚裾と見られる。調整は、内外面ともに横ナデで、内面上半には横方向のハケ目、脚端面には1条の凹線を施す。胎土は精良で、色調は器表が淡橙色、胎土は淡黄褐色である。29と30は同一個体と見られ、脚端部径11.0cmである。短い脚柱から強く屈曲して、大きく聞く低平な脚裾が付くもので、接合法により体部と接合すると考えられる。底部中央には径6~8mmの円孔が穿たれている。調整は、脚柱部外面が丁寧なナデ、脚裾部外面は縦方向のハケ目で、内面は調整不明である。比較的精良な胎土で、色調は器表が淡黄褐色、胎土は灰黒色である。



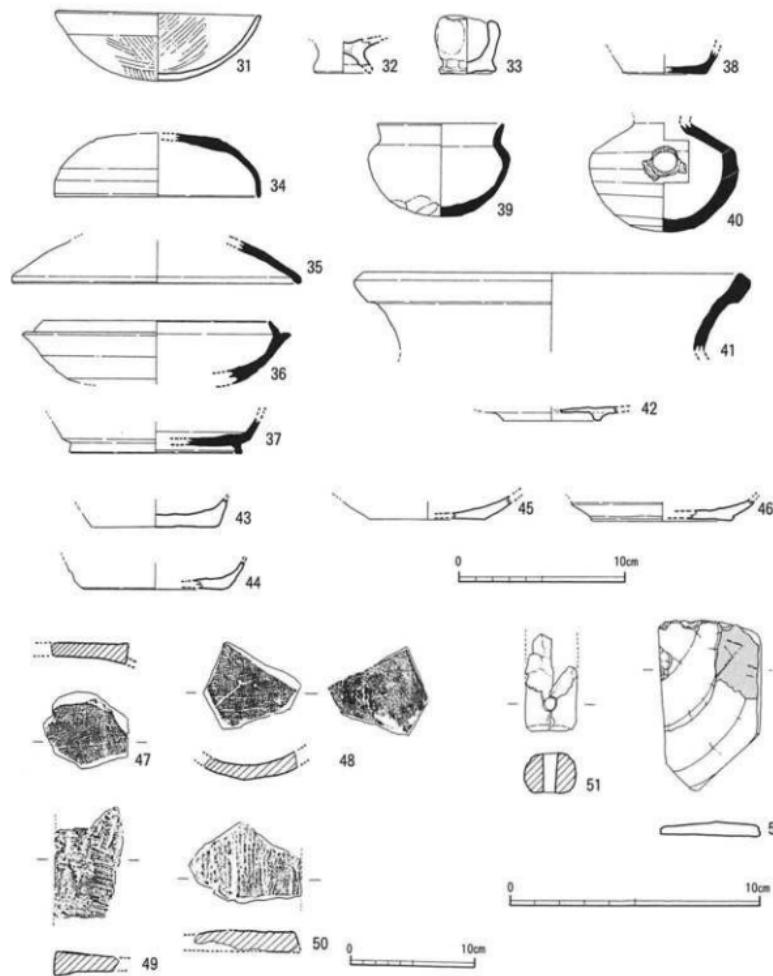
第11圖 出土遺物実測図 (1) (1:3)

31は浅いボウル状の碗で、復元口径12.3cm、器高4.0cmである。調整は、内面が斜め方向のヘラミガキ、外面は口縁部が横ナデ、体部は縦方向ないしは斜め方向主体のハケ目を施す。色調は黄褐色である。32は復元脚端部径3.6cmの低脚で、脚端の内外面に赤色顔料の塗布がみられる。体部との接合は円板充填法による。調整は、脚端部内面に横ナデがみられるが、その他は調整不明である。33は手づくね土器で、小壺状である。口径2.9cmで、調整は体部が指頭調整、体部外面下端には指頭押圧がみられる。外底面はほぼ平坦だが、緩やかな凹凸がある。

② 須恵器 (34~41) 杯蓋2点(34・35)、杯身2点(36・37)、杯1点(38)、壺1点(39)、甌1点(40)、甌1点(41)である。

34・35は杯蓋である。34は復元口径12.4cmの丸みの強いもので、比較的平坦な天井部から斜め下方にやや内湾気味に延び、緩く屈曲して垂下する口縁部の端部を丸く納める。調整は、外面天井部から体部上半にかけては未調整、体部は部分的に回転ヘラケズリが看取される。外面口縁部から内面体部にかけて回転ナデで、天井部内面は体部側が未調整で中心付近には一定方向のナデつけが認められる。色調は暗灰色である。35は天井部を失っているが、つまみをもつ形態の杯蓋と思われる。斜め下方にはほぼ直線的に延びた体部の端部をごく僅かに屈曲させて口縁部とし、その端部を丸く納める。調整は、内外面回転ナデだが、外面は未調整の可能性もある。色調は、内面灰色、胎土・外面は淡茶褐色である。復元口径17.2cmである。36は復元口径13.6cmの杯身で、内湾気味に外上方に立ち上がった体部の端部を水平に近く僅かに外反させて受部とし、その端部を尖り気味に納める。受部の内側に明瞭な凹部を介して内上方に直線的に延びるたちあがりが取り付く。このたちあがりは比較的長く先細り気味に延び、端部は丸く納めている。調整は、内面から外面の体部上半にかけて回転ナデ、外面の体部下半は回転ヘラケズリを行なう。色調は暗青灰色である。37は高台付きの杯身で、外底面のやや内側にへの字気味の短い輪状高台が付く。体部はやや開き気味に立ち上がる。調整は、内底面未調整でその他は回転ナデである。高台内面中央・下端面が緩やかに凹む。復元高台径10.4cmで、色調は内面灰褐色、胎土・外面暗青灰色である。38は平底の小型の杯で、復元底径5.0cmである。調整は、外底面が回転ヘラ切り、その他は回転ナデである。体部は直線的に外上方に延びる。色調は灰色で、比較的精良な胎土である。

39は口径7.5cm、体部最大径8.5cm、器高5.6cmの壺である。最大径が上半にあり肩の張る扁球状の体部に、緩やかに窄まる頸部から開き気味のごく短く先細り気味の口縁が付く。調整は、外面底部周辺は乱雑なケズリ状のヘラナデで、その他は横ナデを施している。焼成はかなり良好で、色調は青灰～淡茶褐色（胎土暗青灰色）である。40は甌だが口頸部を失っている。体部は最大径が上方にあってやや肩の張る扁球状で、肩部直下には径1.5cmの円孔が穿たれている。円孔の下側縁には何らかの使用に伴うと思われる小剥離がみられる。調整は、内面は不明、外面は体部最大径部より上方が横ナデ、最大径部直下が回転ナデ、体部下半は回転ヘラケズリを施す。色調は淡青灰色で、体部最大径9.0cmである。41は復元口径22.8cmの甌である。外上方に緩く湾曲しながら延びる口縁部の端部を外方に平たく肥厚させ、端部は中央がやや凹むもののほぼ平坦である。調



第12図 出土遺物実測図（2）（1:2, 1:3, 1:4）

整は内外面ともに回転ナデである。

③ 瓦器（42） 復元径5.8cmの輪状高台を付した椀と思われる。胎土は比較的精良で、表面淡灰黒色、胎土淡黄褐色である。

④ 土師質土器（43～45） 小皿と皿がある。

43・44は小皿の底部を中心とした破片である。いずれも底部回転糸切り、体部内外面の調整は不明である。43は底径7.7cmで、色調淡黄褐色である。44は復元底径8.8cmで、色調は表面が暗黄褐色、胎土が灰黒色で、比較的精良な胎土である。45は薄手の皿と思われるもので、復元底径6.9cmである。底部回転糸切りで、体部内外面は回転ナデである。色調は淡黄褐色～黄白色で、比較的精良な胎土である。

⑤ 瓦（47～50） 丸瓦・平瓦がある。

47・48は丸瓦である。47は右下方に玉縁が付くもので、玉縁は失っている。凸面は繩目がほとんどナデ消されている。凹面は布目痕が明瞭に残る。48は凸面が繩目痕、凹面が布目痕である。47・48は、色調が凹面暗灰色・暗黄褐色、凸面・胎土淡灰色で、比較的精良な胎土と色調・胎土が酷似していることから、同一個体の可能性もある。

49・50は平瓦である。49は左側に側端面を残す。凸面に部分的に横方向の板ナデ状の痕跡が見られるが、その他は器壁の損耗により調整は不明である。色調は橙褐色～黄褐色である。50は右側に側端面を残す。凸面繩目痕、凹面は器壁の損耗により調整不明である。色調は淡橙褐色で、胎土は比較的精良である。

⑥ 土製品（51） 棒状土錐の端部の破片である。断面は1.6cm×2.1cmのやや扁球状で、径5cmの円孔を穿つ。色調は表面淡橙褐色、胎土灰黒色で、比較的精良な胎土である。

⑦ 石製品（52） 砕石で、暗褐色の扁平な石材を用いている。片面の一部に残る使用面は平滑で、不定方向の擦痕がいくらか認められる。

#### （6）調査区内出土の遺物（第13図53～72、図版6）

特定の構造に伴わない遺物を一括して記述する。計20点で、繩文土器3点、土師器5点（小型丸底壺・甕・高杯）、須恵器10点（杯蓋・杯身・杯・椀・高杯ほか）、手づくね土器1点、石製品1点（砾石）である。

① 繩文土器（53～55） 器種などは不明で、いずれも小破片である。

53は復元口径23.8cmと大型品の口縁部片である。下端が緩やかに屈曲すると思われ、頸部の可

能性がある。内面上半から外面にかけて横ナデを行なっている。色調は表面が暗赤褐色、胎土は淡褐色で、3mm以上の砂粒を多く含んでいる。54・55は器形を窺うことのできない小破片で、54は内面が斜位気味の横位条痕、外面は上位に横方向の沈線1条とその周囲に丁寧なナデ状の調整、下半は斜め方向の条痕を施している。色調は表面褐色、胎土暗褐色で胎土には1~2mm程度の砂粒を比較的多く含んでいる。55は内面の調整は不明、外面は上半に幅1.1cm、高さ2mmほどの断面三角形の突帯を貼り付け、その頂部には8mmから1cm程度の間隔で斜め方向の刻み目を施している。この突帯の上下には横方向のナデ調整がみられるが、下半は調整不明である。淡黄褐色の色調で、1mm程度の砂粒を多く含む。

② 土器類 (56~60) 小型丸底壺1点(56)、甕1点(57)、高杯(杯部)2点(58・59)、高杯(脚部)1点(60)がある。

56は復元口径11.1cm、復元体部最大径7.3cm、器高7.1cmの小型丸底壺である。口径が体部最大径に較べてかなり大きく、口縁部の高さと体部の高さがほぼ等しい。頸部の締まりは緩く、体部はかなり扁平な球形である。器壁は口縁部が1.5~3.5mm、体部が2.5~4.5mmと薄い。口縁は幾らか先細り気味で、端部は丸く納めている。調整は、口縁部内外面から内面体部上半付近まで横ナデ、内面体部下半は丁寧なナデつけ、体部外面は頸部直下が指頭による押さえ、その下方から体部最大径部までが斜め方向の細かいハケ目、体部下半は横方向のヘラミガキである。色調はやや赤みを帯びた淡黄褐色である。

57は復元口径14.2cmの甕の口縁部で、頸部で比較的鋭く屈曲して、外反しながら外上方に立ち上がった口縁部の端部を丸く納める。調整は、内面は不明、外面は横ナデである。色調は淡橙~淡黄褐色(胎土淡灰黒色)である。

58・59は高杯杯部、60は高杯脚部である。58・59は比較的良く似た器形で、丸みをもつ体部からごく緩やかな段を介して口縁部に続く。口縁部は斜め上方にほぼ直線的に延び、上半で僅かに外反する。尖り気味の口縁端部を丸く納める。体部と口縁部の境は丸みが強く不明瞭である。58の下端には接合面が残り、恐らく脚部とは挿入付加法により接合されていたと思われる。調整は、口縁端部付近の内外面が横ナデ。その他の内面が横ナデのち縦方向のヘラミガキ、口縁部下半から体部にかけての外面は横ナデのちヘラミガキあるいはヘラナデを行なっている。色調は表面黄褐色、胎土灰黒色で、胎土は比較的精良である。復元口径13.4cmである。59の調整は、内面は器壁損耗のため調整不明だが、横方向のヘラミガキの可能性がある。外面は、口縁部上半が横ナデ、口縁部下半から体部にかけて横ナデのちヘラミガキと考えられる。色調は橙色、胎土は精良である。復元口径13.8cmである。60は細長い筒状の脚柱部で、中実である。調整は、内面は調整不明、外面は縦方向のハケ目を施している。色調は、表面黄褐色、胎土黒褐色である。

③ 手づくね土器(61) 鉢状で、底部と口縁端部を失っている。丸みの強い底部から直立した分厚い体部に僅かに外反するごく短い先細りの口縁部が付く。体部最大径7.6cmである。調整は、

口縁部内面はナデ調整、体部内面は指頭によるナデつけ、外面の口縁部は指頭押圧、体部はナデ調整を施している。色調は、外面橙色・灰黒色、内面橙色、胎土灰黒色で、胎土は比較的精良である。

④ 須恵器 (62~71) 杯蓋 2 点 (62・63)、杯身 4 点 (64~66・70)、底部 1 点 (67)、杯 2 点 (68・69)、高杯 1 点 (71) である。

62・63は杯蓋で、62は中央が大きく凹む扁平なつまみの部分である。つまみの径は2.6cm、高さ0.5cmで、調整は内面が未調整で部分的に一定方向のナデが見られ、外面は回転ナデを施している。色調は暗灰色である。63はほぼ水平な天井部から斜め下方に直線的に延びた体部の端部を強く屈曲させてごく短い口縁を垂下させている。口縁端部を丸く納める。調整は、内面は未調整、天井部外面は回転ヘラ切り後未調整、体部は未調整で、体部下端から口縁部にかけて回転ナデを施す。口縁部外面は僅かに凹む。色調淡灰色、胎土精良で焼成もかなり良好である。

64~66は輪状高台付きの杯身で、復元高台径9.2~10.2cmである。高台は断面台形か方形で、外面部と体部の境のやや内側に付けられており、ハの字状に外方に踏ん張るもの (64・65) と直立するもの (66) がある。いずれも高台の下端面 (疊付) の中央が緩やかに凹む。調整は、いずれも内外面回転ナデを施す。64・65は暗灰色の色調で、64は比較的精良な胎土である。66は内面・胎土は淡灰黒色、外面淡灰色の色調で、比較的精良な胎土である。

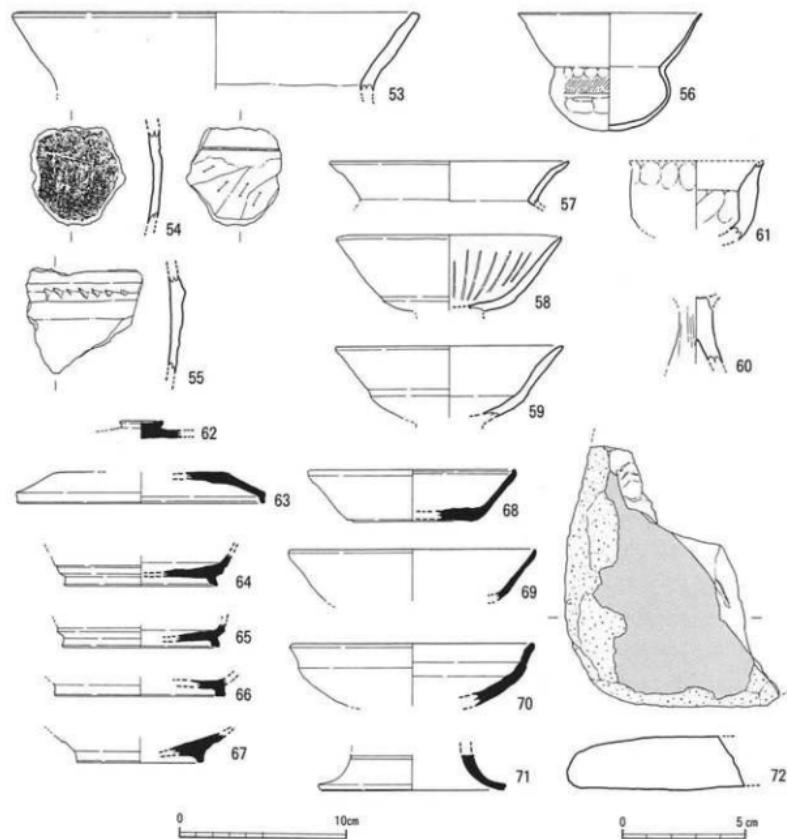
67は復元高台径7.5cmの、器形が不明な底部片である。高台は断面逆台形でほぼ直立する。調整は、外面の上端に部分的に未調整と思われる箇所があるが、ほぼ内外面ともに回転ナデを施している。暗灰色の色調で、胎土は比較的精良である。

68・69は杯で、68は復元口径12.2cm、復元底径7.8cm、器高3.1cmである。分厚い平底の底部から体部が直線的に外上方に延び、上半で僅かに外反し端部を緩やかに内反させて丸く納める。口縁端部の外面は丸みが強く、内面は凹線状に凹む。底部回転ヘラ切り後板目痕で、内底面・体部内外面は回転ナデを施す。色調は暗青灰色で、胎土は精良である。69は復元口径14.8cmとやや大型の杯だが、底部からほぼ直線的に外上方に立ち上がった体部上半で僅かに外反し、そのまま延びた口縁部の端部外面に丸みをもたせてやや尖り気味に納めている。調整は、内外面ともに回転ナデである。色調は淡青灰色で、胎土は比較的精良である。

70は分厚い器壁をもつ比較的高い高台をもつと思われる杯身である。やや内溝気味に外上方に立ち上がったのち直立し、短く外反した口縁部の端部を丸く納める。調整は内外面ともに回転ナデを施す。色調は暗青灰色で、胎土は精良である。復元口径14.3cmである。

71は高杯脚部と思われ、上端に方形の透かしの痕跡が残る。強く外反してほぼ水平になる脚端部の端面は平坦である。外面の透かしの直下に1条の沈線が廻る。調整は内外面ともに回転ナデである。復元脚端部径11.0cmである。色調は器表が暗灰色、胎土は暗褐色で、比較的精良な胎土である。

⑤ 石製品 (72) 砥石 1 点がある。暗黄白色の扁平な石材を用いている。表面に比較的広い平滑な使用面が認められるが、擦痕は明瞭にはみられない。左側面から下側面にかけて大きく自然面を残す。右斜め上方は折損で失っている。裏面には大きな剥離痕が認められる。現存規模は、 $8.65\text{cm} \times 10.5\text{cm}$ 、厚さ（最大） $2.2\text{cm}$ である。



第13図 出土遺物実測図 (3) (1:2, 1:3)

## V まとめ

本遺跡については、平成12年度に三太刀山内部の平坦地の調査を行い、14世紀代を中心とする中世集落跡を検出した（A～D区）。今回の調査区（E区）はその西側至近距離に位置しており、中世集落跡の西への広がりが予想された。しかし、調査の結果、E区は近世末以降に大きく削平を受けており、そのために中世の生活面が失われていることが判明した。そして、調査区南半において、古墳時代～古代の谷状の遺物包含層と包含層下などで3軒の竪穴住居跡を検出した。ここでは、出土遺物（土師器・須恵器）と竪穴住居跡について若干の検討を行ない、まとめてかえたい。

### （1）出土遺物について

土師器は主に包含層下層（②層）から、須恵器は主に包含層の上層（①層）から出土した。ここでは、調査区出土のものを加えて検討する。

#### ① 土師器 包含層出土の土師器には壺・甕・高杯・碗・低脚杯があるが、高杯・甕が多い。

壺2点はいずれも直口壺の口縁部で、1は強く窄まった頸部からラッパ状に開く先細りの口縁で、2は綺まりの緩い頸部から開き気味に直立する形態の口縁である。また、調査区出土の小型丸底壺（56）は扁球状の体部に大きく開く口縁部が付くもので、口径が体部最大径よりも大きい。

甕は二重口縁のものと頸部でくの字に曲がる単純口縁のものとがある。二重口縁のものは頸部から緩く外反する短い擬口縁の端部に開き気味の口縁が付くもので、接合部が明瞭である。単純口縁のものは頸部でくの字に鋭く屈曲するもの（10・11・57）と比較的緩く曲がるもの（9・12）とがある。いずれも頸部から直線的に延びる先細り気味の口縁だが、口縁部の断面と端部の形状に微妙な違いが認められる。口縁端部は9・11が平坦に、10・12は丸く納めている。57は頸部からほぼ直線的に立ち上がり、端部近くでやや外反して尖り気味に納める。9のみ内面の口縁端部直下が僅かに凹む。

高杯の脚部は、脚柱部下端で屈曲して脚裾が広がる形態のものと緩やかに外反しながら広がるものとがあり、前者が主体的である。杯部はほぼ水平かやや内湾気味の体部に外反気味に開く口縁が付くもので、包含層出土の4点（13～16）と調査区出土の2点（58・59）の間にはやや形態的な差違がみられる。包含層出土のものは、外面の体部と口縁部の接合部に比較的明瞭な微隆起線状の稜がみられ、特に14では明確な段差を形成している。杯部の形状は比較的明瞭な逆台形である。これに対して、調査区出土のものは接合部がごく緩やかな段を形成するものあまり明瞭でなく、杯部の形状は全体に丸味を帯びる。また、前者が口径16.6～19.6cmと大型であるのに対して、調査区出土の2点は口径13.4～13.6cmとやや小型である。これらの違いは時期差として捉えられ、後者がやや後出的と言えよう。

壺・甕・高杯の主に口縁部の形態的特徴から、これらの土師器は寺沢編年の布留1・2式期（4世紀前半）を中心にはぼ布留0～3式期（3世紀末～4世紀第3四半期）併行のものと考えられる。

② 須恵器 杯蓋・杯身・杯・高杯・壺・甕・壺などが出土しているが、杯蓋・杯身が多い。包含層から出土したものは、6世紀後半から7世紀代の一群<sup>(32)</sup>（34・36・39・40）と一部9世紀に及ぶがほぼ8世紀代を中心としたもの（35・37・38・41）とに分けることができる。調査区出土の須恵器は、一部7世紀代のもの（70）や9世紀前半に及ぶ可能性のあるもの（68・69）があるもののほぼ8世紀代のなかに納まると考えられる。

以上のように、包含層下層（②層）を中心に出土した土師器の年代は4世紀前半を中心とし、包含層上層（①層）から主に出土した須恵器は一部に6世紀後半～7世紀代のものを含むものの大半は8世紀代を中心とするものである。これらから、本遺跡の時期は、大きく古墳時代前期の4世紀前半を中心とした時期と奈良時代の8世紀代を中心とした時期の2時期あり、そのほか古墳時代後期の6世紀後半～7世紀代の存在も考えられる。

## （2）堅穴住居跡について

調査区南半の包含層下で2軒（SB1・SB2）、調査区北東部のE3区とE4区の境付近で1軒（SB3）の計3軒を検出した。いずれも大きく削平を受け、高所側の住居跡西半を中心に残存しており、その全容は不明である。部分的に壁溝と柱穴状のピットを検出しているが、明確な柱の配置などは分からず、残存する壁溝の形状から住居跡の平面形は方形ないしは隅丸方形と考えられる。一部の柱穴などから出土した土師器細片が包含層下層から出土しているものに比較的近いことから、本集落跡の時期も包含層出土土師器の時期とそれほど違ないと考えられる。

ところで、これらの堅穴住居跡は包含層下の谷地形に立地する2軒（SB1・SB2）と、本来は恐らく谷に臨む丘陵端部の斜面に立地したと思われる1軒（SB3）に分かれる。すなわち、幅10数m、長さ50m程度の狭い谷に臨む緩斜面と谷頭部を中心に本集落は存在したと考えられる。このようにごく狭い谷地形の周囲に展開する古墳時代の集落跡としては、比較的近いところでは東広島市・助平3号遺跡がある。この遺跡では、ほぼ南から北西方向に延びる幅約10數～20mの自然流路に臨む東側緩斜面を中心に平面方形の堅穴住居跡が重複して作られ、自然流路内部にも堅穴住居跡や掘立柱建物跡がいくらか存在する。この自然流路内からは多くの土師器・須恵器のほかに製埴土器・木製品・祭祀遺物（手づくね土器・滑石製小玉など）が出土している。祭祀遺物は量的には少ないが住居跡からも出土している。また、土師器のなかでは器種的には高杯が多く出土している。集落跡の中心的な時期は、船橋遺跡O-II地点出土土器群の時期（寺沢編年の布留4式新相）から陶邑I型式4段階（TK-23型式）頃を中心としており、三太刀遺跡E区よりもやや新しい。

4～5世紀の古墳時代前・中期の集落跡の調査例は広島県ではそれほど多くない。本遺跡出土のものに比較的類似する土師器が出土した堅穴住居跡を含む集落跡としては、県南部では河内

町・山居遺跡<sup>(4)</sup>（SB1），東広島市・助平2号遺跡<sup>(5)</sup>（SB51），同助平3号遺跡<sup>(6)</sup>（SB7・8・13・16・18・19・SX12・自然流路），同古市2号遺跡<sup>(7)</sup>（01・02号住居跡），同古市4号遺跡<sup>(8)</sup>（01・03号住居跡），同徳政遺跡<sup>(9)</sup>（1・3・4・6号住居跡）などがある。助平3号遺跡・徳政遺跡を除けば1遺跡あたり1～2軒の検出であり，集落構造や性格などは不明確である。多くは丘陵上や斜面に立地し，手づくね土器をはじめとする祭祀遺物が出土している。なかでも，助平3号遺跡や古市2号遺跡02号住居跡では手づくね土器以外の多様な祭祀遺物（滑石製の勾玉・有孔円板・小玉，土製の勾玉・管玉，鏡形・舟形土製品など）の出土が見られ，集落内・住居内祭祀の存在が考えられる。

ごく限られた範囲の調査ではあるが，以上のことから三太刀遺跡E区の集落跡は，集落の立地，土師器・高杯の出現頻度の高さ，祭祀的遺物（手づくね土器33・61）の出土など，集落内・住居内祭祀を伴う古墳時代前期の集落跡と考えられる。

#### 註

- (1) 寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」奈良県立橿原考古学研究所編『矢部遺跡』 1986年
- (2) 須恵器の年代は主に次の文献に依拠した。  
田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年  
中村浩『入門須恵器』柏香房 1990年  
山田邦和「飛鳥・白鳳時代須恵器研究の展望」「古代文化」第40巻第6号 財團法人古代學協會 1988年  
小笠原好彦・西弘壽「第V章考察2土器」奈良國立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』VII 1976年  
伊野近富「籐麻原型と陶邑窓原型の須恵器について」財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター「京都府埋蔵文化財情報」第37号 1990年  
石井清司「籐麻の実年代」財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター・京都府埋蔵文化財論集編集委員会編『京都府埋蔵文化財論集』第4集 2001年
- (3) 東広島市教育委員会「助平3号遺跡」「西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」 1992年  
財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「助平3号遺跡」「西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(Ⅰ) 1993年
- (4) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「山居遺跡」 1991年
- (5) 広島県教育委員会（財）広島県埋蔵文化財調査センター「助平2号遺跡」「西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(Ⅰ) 1983年
- (6) 東広島市教育委員会「古市2号遺跡」「西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」 1992年
- (7) 東広島市教育委員会「古市4号遺跡」「西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」 1992年
- (8) 東広島市教育委員会「徳政遺跡発掘調査報告書」 1982年





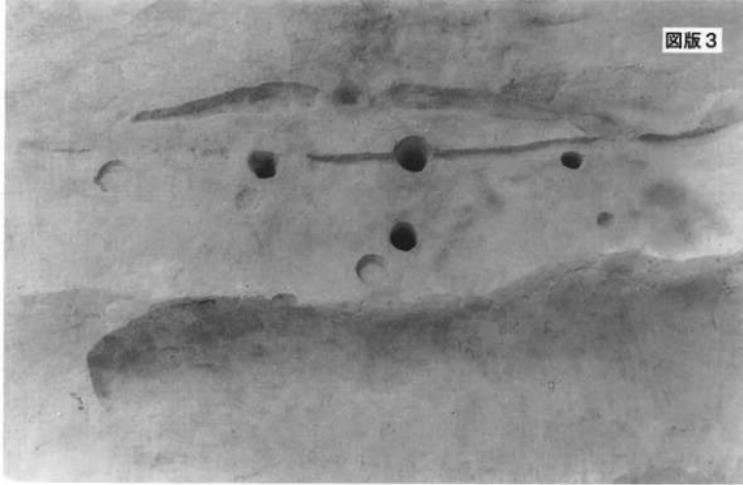
a 遺跡全景  
(調査前, 南東から)



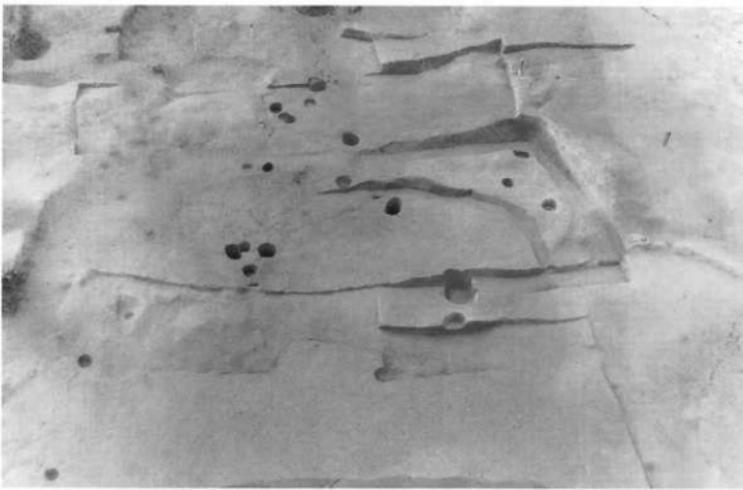
b 遺跡全景  
(調査後, 南から)



c 遺跡全景  
(調査後, 北から)



a SB 1 (東から)



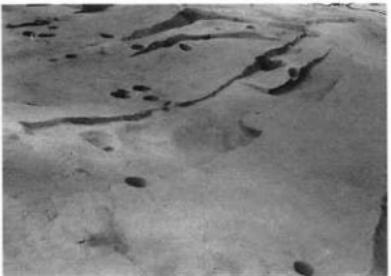
b SB 2 (東から)



c SB 2 (北から)



a S B 2 (東から)



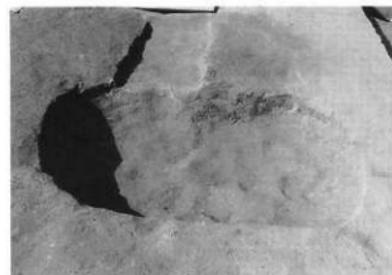
b S B 2 (南東から)



c S B 3 (東から)



d S K 1 (西から)



e S K 2 (南から)



f S D 1 (東から)



g S B 1 作業風景 (東から)



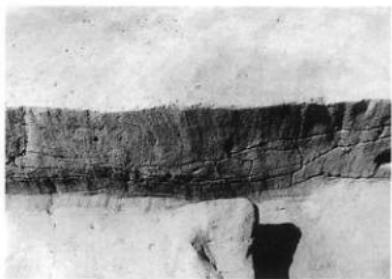
h S D 1 周辺作業風景 (西から)



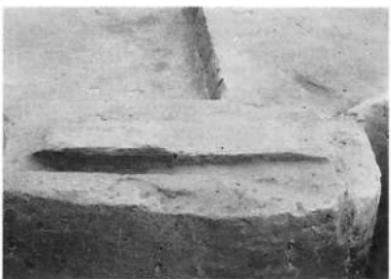
a SX 3 (東から)



b SX 4 (西から)



c SX 3土層 (東から)



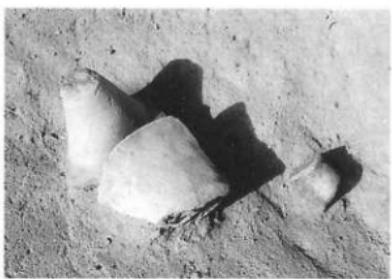
d SX 4土層 (西から)



e SX 1 (東から)



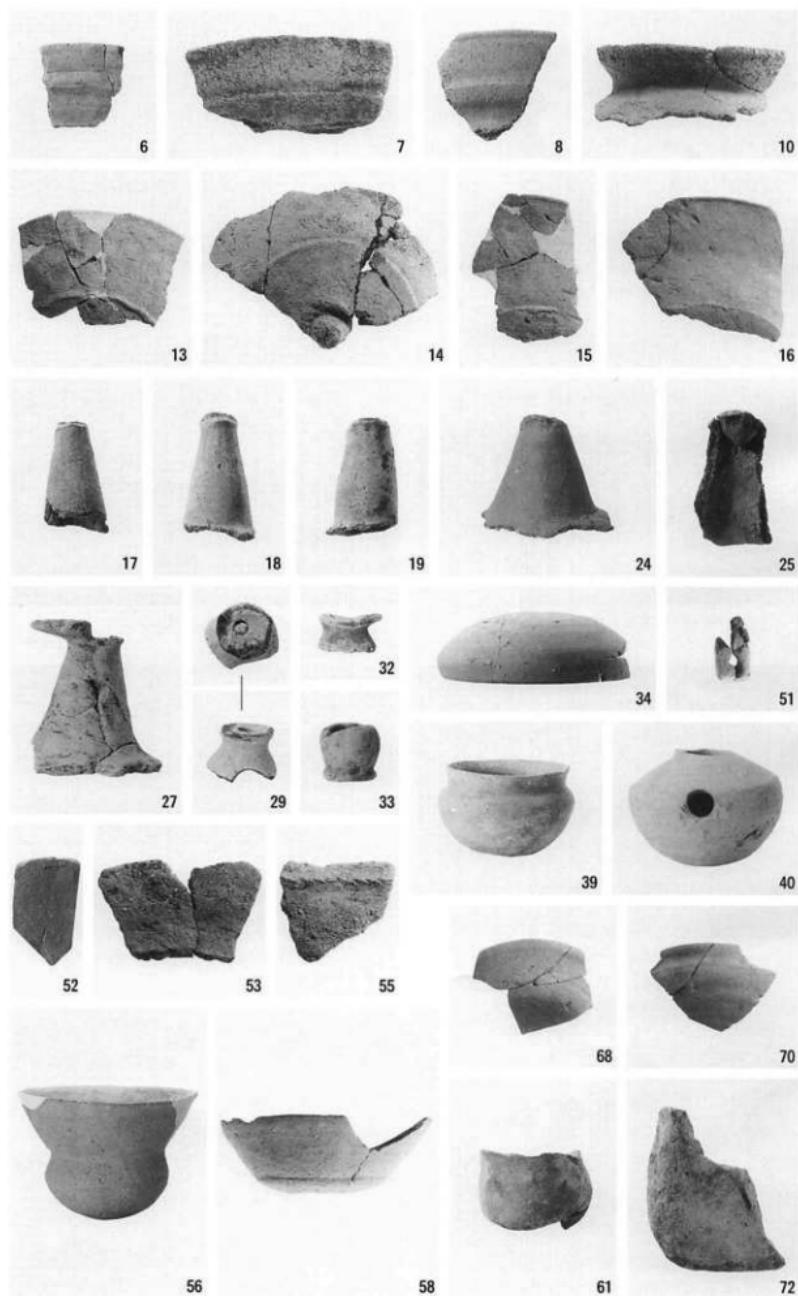
f 包含層土層 (B-B'，北東から)



g 包含層遺物出土状況 (E 1区，南から)



h 包含層土層 (C-C'，北東から)



出土遺物

## 報告書抄録

| ふりがな<br>書名<br>副書名<br>巻次<br>シリーズ名<br>シリーズ番号<br>編著者名<br>編集機関<br>所在地<br>発行年月日 | みたちいせき<br>三太刀遺跡(II)<br>東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書<br>3<br>財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書<br>第3集<br>梅本健治<br>財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室<br>〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8-49 TEL 082-295-5751<br>西暦2004年3月31日 |            |                                  |                   |                    |  |                                |                    |
|--|--|------------|----------------------------------|-------------------|--------------------|--|--------------------------------|--------------------|
| ふりがな<br>所収遺跡   | ふりがな<br>所在地  | コード        |                                  | 北緯                | 東經                 | 調査期間   | 調査面積<br>m <sup>2</sup>         | 調査原因               |
| 三太刀遺跡  | 広島県<br>豊田郡本郷町本郷  | 34421      | 250                              | 34°<br>24'<br>15" | 132°<br>59'<br>50" | 20020909<br>~<br>20021115  | 812                            | 東本通土地区画整理事業に係る発掘調査 |
| 所収遺跡   | 種別   | 主な時代       | 主な造構                             |                   |                    | 主な遺物   | 特記事項                           |                    |
| 三太刀遺跡  | 集落跡  | 古墳時代<br>古代 | 堅穴住居跡3軒<br>土坑2基・性格不明の造構4基・構造造構1条 |                   |                    | 土師器(壺・壺・高杯),<br>須恵器(壺・杯盤・杯身),<br>土師質土器, 瓦,<br>棒状土錐, 研石, 織文<br>土器 | 包含層下の堅穴住<br>居跡, 集落内・住居<br>跡内祭祀 |                    |

### 財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第3集

#### 三太刀遺跡(II)

東本通土地区画整理事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

発行日 平成16(2004)年3月31日  
編集 財団法人 広島県教育事業団埋蔵文化財調査室

〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号

TEL (082)295-5751

発行 財団法人 広島県教育事業団  
〒730-0011 広島市中区基町4番1号  
TEL (082)228-8451

印刷所 鯉城印刷株式会社